

ダイヤ高齢社会研究財団・国際長寿センター共催 国際シンポジウム

高齢化先進国の日本！ みんなが主役となって創る地域社会とは

—海外と日本の最新トレンドから高齢者の活躍を考える—2018年11月16日開催

ダイヤ高齢社会研究財団 企画調査部 次長 佐藤 博志



ダイヤ高齢社会研究財団（以下、ダイヤ財団）は国際長寿センターと共催で、人生100年時代における高齢者の活躍をテーマとした国際シンポジウムを開催しました。

【冒頭】開会挨拶およびシンポジウムの趣旨説明

シンポジウムの開催にあたり、ダイヤ財団常務理事 樋渡 泰典（写真左）から開会挨拶、国際長寿セン



ター室長 大上 真一氏（写真右）からシンポジウムの趣旨説明がありました。

- ・現在、世界各国は、高齢者が豊かな社会づくりのために地域の中心となって重要な役割を果たすことを目指している。
- ・本シンポジウムでは、高齢者が個々に置かれた状況に応じて他者のために力を発揮する「プロダクティブ・エイジング」を実現する海外と日本の最新事例を紹介する。
- ・高齢化が進む日本において皆様自身が地域の中で主人公となって大きく力を発揮されるきっかけとなれば幸いです。



以下、シンポジウム内容の一部を紹介します。

【第1部】講演 「海外の最新トレンド」

東京家政大学 人文学部 准教授 松岡 洋子氏

「地域ケアと高齢者の地域貢献に関する海外のトレンド」

高齢化の進行に対する強烈的な危機感を持ち、「福祉国家」から「参加型社会」への大改革が進められている欧州の状況につき、講演いただきました。



- ・欧州の「参加型社会」の潮流としては、「エイジング・イン・プレイス：住み慣れた地域で、最期まで」を基本として、個人および地域の自立により「してあげる」から「するを支える」に移行した取組みがなされている。
- ・イギリスでは、ケア法2014施行により、ケアパッケージ（施設でのケアサービス）から自己決定（自分にとってのウェルビーイング）に基づいたサービス提供に移行しており、自治体と専門職との連携により、100を超えるプロジェクトが発足、65%のケアパッケージが不要となった自治体がある。
- ・デンマークでは、介護希望者全体の48%が介護に先立つりハビリにより改善し、ケアサービスが不要となった自治体もある。
- ・オランダでは、政府による介護保険の自治体運営への移行が進行し、「ソーシャルバイクチーム」という各自治体でのよろず相談窓口による高齢者の各種相談が実施されている。

オランダ国際長寿センター 事務局長

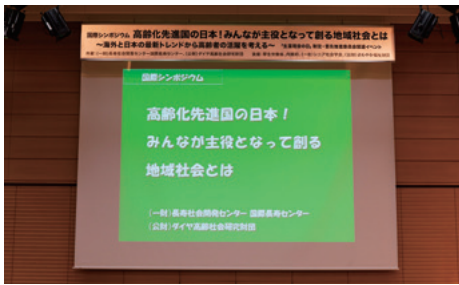
マリエック・ヴァン・デル・ワール氏

「高齢者はどのように地域を創っているか」

オランダにおける「参加型社会」の事例につき、講演いただきました。

- ・オランダでは、2013年の国王の国会開会の辞を契機に「福祉国家」から「参加型社会」へのパラダイムシフトが加速しており、できる人は皆、自らの生活や身近な人たちに対して責任を持つよう求められている。
- ・この大きな変化事例として、「55歳から64歳の労働参加率の顕著な増加」、「各自治体の支援のもとでの『ソーシャルバイクチーム（社会近隣チーム）』による高齢者に対する活発な各種支援実施」、「ボランティア依頼者と希望者を仲介する『ボランティアコーディネーター』の幅広い活躍による多岐に渡るボランティア活動」等が起きている。





【第2部】講演 「日本の最新トレンド」 医療経済研究機構 主任研究員 服部 真治氏 「日本における高齢者の地域参加、社会貢献」

超高齢化の日本における高齢者の最新状況につき、講演いただきました。

- ・日本では、2006年に介護保険法が改正され、要介護（要支援）者の増加が一旦鈍化したものの、予防重視型システムの効果が期待どおり上がらず、軽度者を中心に近年増加のペースが再び拡大している。
- ・他者との交流頻度を増やすと介護予防につながることで、地域社会参加率の高い自治体の認知症リスクが低いことが、調査により判明。
- ・社会参加は、体を動かすことに加え、支援すべき人を知る機会の創出につながることで、「生活支援コーディネーター」の配置を介護保険法の支援事業のひとつと位置づけており、「したいこと」を「なじみの」環境の中で続けるという自立支援に対する意識改革を更に強化する必要がある。
- ・八王子市には、住民の通いの場の設置、保育園、民間企業、大学との連携等多岐に渡る地域参加事例がある。



荻窪家族プロジェクト 代表 瑠璃川 正子氏 「住民自らが創り出すつながりあう場づくり」

日本の事例として、杉並区荻窪における賃貸スペース+オープンスペースからなる荻窪家族プロジェクト「百人力サロン」を紹介いただきました。

- ・こころ豊かに高齢時を過ごすには緩やかな百のつながりが必要と考え、サロンを創設。
- ・サロンでは「番頭さん」と呼ぶボランティアが企画から清掃等運営全般に関わり、ボランティアの方々の人柄・個性を尊重し、身の丈にあった無理のない範囲での参加により、みんなの「できる」を引き出す、こころ温かい地域になるよう、今後も百のつながりを生かす運営を目指す。



横浜市磯子区 高齢・障害支援課 保健師 瀧澤 由紀氏 「高齢者の主体性を引き出す通いの場づくり」

日本の事例として、市民と横浜市が協働した地域活動グループ「元気づくりステーション」を紹介いただきました。

- ・ステーションのうち、「ふくろう会」は、男性の参加率が高く、会社などで培ったノウハウが活動に生きていることが特徴。
- ・「ふくろう会」では、前半は体操、後半は個人の特技を生かした内容で、参加者一人一人が講師役。引き続き主体的かつ活発な活動となるよう自治体として支援していく。



【第3部】パネルディスカッション パネリスト 第1部および第2部講演者

コーディネーター ダイア財団 主任研究員 澤岡 詩野

地域活動への「参加」「自立」「つながり作り」を支える視点から、地域のコーディネーターの役割をはじめ地域活動の将来像や期待することについて、講演各氏よりコメントをいただきました。



紙面の都合で一部しか紹介できませんでしたが、シンポジウムの講演録を発行（2019年3月予定：無料）いたします。ご希望の方は当財団までお申込みください。